|  |
| --- |
| **2016年度　修士論文要旨**  **UXカーブのリアルタイム取得システムの開発**  **学修番号　15892526　　横山祥平　　　　　　指導教員　西内信之** |

1. 緒言

　近年技術の急速な発展に伴い，機能性による差別化が困難になったことでユーザがサービスに求めるものは価値のある経験そのもの，つまりUX（User Experience）に変わりつつある．人間中心設計(Human-Centerd Design)分野においては，今までは製品評価にユーザビリティ評価が用いられることが多く，主に使いやすさの向上に役立ってきたが，現代では更に魅力を高める為にUXという概念が提唱されている．UXとは，製品やサービスの利用時または消費した時に得られる体験のことで，機能や使いやすさだけではなく，ユーザが真にやりたいことを楽しく，心地よく実現できるかを重視した概念である．

　主なUXの評価手法としては，エスノグラフィー調査，ペルソナ，UXカーブ(UXCURVE)，ESM（Experience Sampling Method）やDRM（Day Remember Method）が使用されている．しかし，エスノグラフィー調査，ペルソナでは設計者の推測度合いが高く，ユーザの潜在的な欲求を抽出することは困難である．UXカーブ(1)やDRMは回顧的な評価になるため，長期になるに伴い簡略化やバイアスが発生してしまう．これらのことから，利用中の詳細なUX(一時的UX)も合わせて取得することが重要だと考えられる．以上の問題点に着目し，塙氏ら(2)はスマートデバイスを用いて，一時的UXを逐次入力できるアプリケーション(UXPLOT)を開発した．しかし，このインタフェースがUXの評価に適しているかは十分な検討がされておらず，課題として残されていた．

　以上の課題に着目し，本研究ではUXPLOTのインタフェースがUXの取得に及ぼす影響の検証を行う．今回の実験では，入出力インタフェースについて，従来のUX評手法であるUXカーブと比較しながら検証を行った．

* 1. UXとその期間

　UXはユーザビリティと異なり利用前の経験も含まれる．それぞれの期間によってUXを分類することができ，利用前（予期的UX），利用中（一時的UX），利用後（エピソード的UX），利用時間全体（累積的UX）に大別される．



図1. UXの期間

1.2 UX取得システム（UXPLOT）

　スマートデバイスは，Apple社のiPhone5sを用いて開発した．スマートデバイスの画面全域のスワイプ操作でUX値(ポジティブ/ネガティブ：±100％の値)を入力することができる．UX値の入力を終えると感情が生じた要因と感情の種類の2つの項目を入力することでUX値が確定する．本研究ではユーザへのフィードバックとなるグラフがある場合とない場合（図2），感情が生じた要因と感情の種類をテキストで入力する場合と音声で入力する場合(図3)の2種類のインタフェースの比較検証を行う．

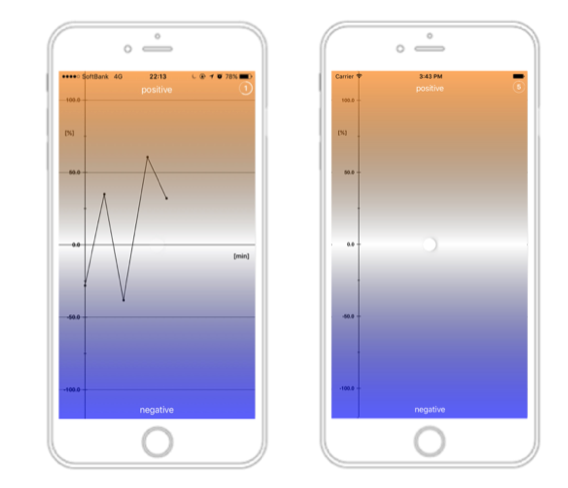


図2.出力インタフェース

(a)グラフあり (b)グラフなし



図2.入力インタフェース

(a)テキスト入力 (b)音声入力